



発生物学、細胞・分子の環境、
関連研究から学ぶ

食べる・飲む メカニズム

厚生研究会・氏家賢明・大野
謙・日本歯科新聞社「食べる・
飲むメカニズム研究会」編集
A5判
112p
2,000円＋税
日本歯科新聞社

近年、歯科医師の目的が疾患・病態を主眼としてきた形態中心のやり方から変わり、口腔環境の維持回復を評価するようになってきた。しかし、何をもって「口腔環境」と評価するのか明確ではなく、患者を通じて口腔環境の育成・加齢による機能低下や機能障害への対応が一つに結びついていかなかった。

本書は、食べたり飲んだりする機能に関して、多職種が共有すべき知識と知見を、その専門領域の人が読んでも理解できるように、分かりやすくまとめたもの。10年にわたり臨床現場や高齢者の現象・臨床の問題に取り組んできた故・栗田浩美氏(「食べる・飲むメカニズム」の監修)を筆頭としている厚生研究会と、栗田氏の考え方を発展させて歯科臨床を行っている歯科医師らが執筆を担当した。

第1章では、口と手や目の協調、姿勢や呼吸との関係など、食べる・飲むに関わる全身のメカニズムを解説できる。写真、イラストなどを用いて解説。食事介助される側の視点が重視されており、食べる意識を引き出し、機能を発揮する方法が分かる。第2章では、近年、海外で研究の進んだ聴覚と嗅覚の関係など、食べる機能に関するさまざまな情報を紹介。第3章では、胎児期からの口腔機能の発達過程、発達時期の評価などについて、Q&A形式で説明。今、悩んでいる「うまく食べられない子」への対応も分かる。



アドバンスド・ サイドリーダー おさえておきたい 全身疾患のポイント

高杉嘉弘 著
AB判
164p
3,800円＋税
学建書院

さまざまな疾患を持つ人に対応するために知っておくべき全身疾患と患者管理のポイントをピックアップした書。これから内科学を学ぶ歯科学学生から、すでに現場に立っている臨床医まで、広い読者層を想定して編集されている。著者は、医学部の麻酔科で講師を務める歯科医師。

循環器疾患、呼吸器疾患、脳血管障害、腎疾患、代謝・内分泌疾患、血液疾患・凝固異常、消化器疾患、免疫疾患、精神疾患、神経・筋疾患、小児・高齢者・妊婦に分け、病気の原因、検査数値や症状、歯科診療に当たって注意すべきことを多数の図表とともに整理。参考文献をそれぞれ明記しているので、より深く学習したい際に役立つ。

特に、高血圧、糖尿病、肥満、脂質異常など、重大な全身疾患につながるとされる生活習慣病の患者数、腎不全に至る可能性のある慢性腎疾患(CKD)の患者数、「たばこ病」といわれるCOPDなど罹患率の高い慢性疾患には注意が必要で、外来・訪問診療を問わず、歯科診療時に遭遇する機会が多くなると考えられる。その際、緊急を要する病的な状態なのか、正常範囲かを判断することが、歯科医療現場でも求められる。

内科学のサイドリーダーとして作られているため、臨床現場でいざという時に使えるような作りではないが、全身疾患についてより深い理解を得たいという際の道しるべとなるだろう。